

教員養成学部におけるカウンセリング分野の教育システムの開発

— 自らのこれまでの研究とこれからの研究方針について —

相 模 健 人

(教育心理学教室)

(平成18年6月2日受理)

The study of developing an educational strategy focusing on concrete
counseling techniques in faculty of education.

Hope and vision for establishing a new field on the basis of the results of
my previous researches

Takehito SAGAMI

I.はじめに

本稿では筆者のこれまでの研究と、筆者が平成15年度から行ってきた科学研究若手研究(B)「教員養成学部におけるカウンセリング分野の教育システムの開発」を総括し、今後の研究方針および研究室運営のあり方について考察を加えるものとする。

科学研究若手研究(B)「教員養成学部におけるカウンセリング分野の教育システムの開発」では、将来スクールカウンセラーとカウンセリングマインドを持った教員が連携協力して、学校現場の様々な問題に対応できるよう、教育システムを構築することを目的としており、具体的には以下の4つを含んでいる。

- ① 大学院生をスクールカウンセラーとして必要な心理療法を習得させるためにビデオシステムを導入し、実践事例を通じた教育プログラムを作成する。
- ② 実践事例をもとに相模、田中(2000a)⁽⁹⁾の作成したコラボレーション面接記録法の作成を中心とした事例データベースを作成する。事例データベースに実践事例を収集、保管する。
- ③ 事例データベースより事例をプライバシーの範囲で改変し学部学生、大学院生の教材を作成する。
- ④ 学部学生、及び大学院生の授業評価を積極的に利用した授業研究を行う。

本稿ではこの目的に沿って、学部、大学院における授業研究、相談活動と大学院教育、卒業論文・修士論文におけるゼミ指導の観点から述べていくこととする。

II.学部、大学院における授業研究

これまで筆者は筆者が担当する「教育相談論」に関する授業研究を行ってきた(相模, 2003a,2003d)^(11,14)(相模・渡部,2004a,2004b)^(15,17)(相模・田中・菅・河合・友寄,2005)⁽²⁰⁾(相模・小嶋・松本,2006a)⁽²²⁾。その結果、些細な事項であっても、学生の意見・アイデアを取り入れて授業を行うことで、授業評価がより高まることが認められた。また授業構成も学生の反応を参考にしながら、学生参加型の授業に変更を行っている。今後はティーチング・アシスタントの活用を課題として進めていくことが求められる。昨年度の研究結果(相模・小嶋・松本,2006a)⁽²²⁾では、ティーチング・アシスタントの活用を後期でより積極的にし、ティーチング・アシスタントの視点を事例提示などに導入したが、前期と比較して、まだこのことによる効果は表れていないと言える。

このような授業研究を行うことにより、教員を目指す学生が不登校やいじめといった学校における教育相談上の諸問題に対する態度の変化、および対応の心構えを身につけていることが伺える。授業研究を行い、変更を加えたよりよい授業を行うことでカウンセリングマインドをもつ教師の育成がより効果的に行えると考え。将来的には学校現場での問題にカウンセリングマインドを持った教師とスクールカウンセラーが連携できることが望ましいと考える。

また、近年は大人数の授業のみでなく、少人数の授業を対象とした授業研究も質的研究を導入し、行っている(相模,2006b)⁽²⁵⁾。KJ法を用いた学生の授業評価の結果からは、学生の細かな意見や授業の改善点について因果

関係も含めた結果が得られ、授業研究のひとつの方法として用いることが可能と考え、今後は大学院など少数の授業研究も行うことが求められる。

Ⅲ.相談活動と大学院教育

これまで筆者は解決志向アプローチを用いた相談活動および事例研究を行ってきた(相模・田中,2000b)⁽¹⁰⁾(相模,2003b,2003c)^(12,13)(相模・山内,2005)⁽¹⁸⁾。またスクールカウンセリングにおける事例研究を行っている(相模・田中,2005)⁽¹⁹⁾。事例研究においては相模・田中(2000a)⁽⁹⁾の作成した「コラボレーション面接記録法」を用いて行い、相談活動を行う際の心理的援助意図を明確にしている。また、実践事例を収集、保管のための事例データベースを作成している(相模・山内・池田,2005)⁽²¹⁾。これにより、さまざまな事例間での検討が可能であり、面接の中でどのような技法が多く用いられ、かつ有効であったかの検討を行いたいと考える。

このような研究をもとに、クライアントにとってより有益な解決志向アプローチの実践のあり方について模索したいと考える。さらに、面接過程の詳細な検討により、実証的に解決志向アプローチの有効性を検討したいと考

える。そして、研究から得られた知見を大学院における臨床心理士育成におけるカウンセリング技法の習得に活用していきたいと考える。

大学院生のカウンセリング技法習得の指導にあたっては、近年、筆者の相談室にビデオシステムを導入している。これによりカウンセリング技法習得においてもチームアプローチによるリアルスーパービジョンを行えるようになった。これにより、大学院生にスクールカウンセラーとして必要な心理療法を習得させる教育プログラムが作成できると考える。

課題としては近年、個人情報保護法が制定され、従来からの守秘義務の遵守とともにより一層の個人情報の保護が重要である。

Ⅳ.卒業論文・修士論文におけるゼミ指導

筆者が本大学に赴任して4年間の間、学部生9人、大学院生8人の卒業論文・修士論文を指導してきた。現在も学部生2人、大学院生3人を指導しているところである。これまでの卒業論文・修士論文のタイトルは表のようになる。また、この中のいくつかについては紀要等に投稿され、研究結果が公表されている(加藤・向井・相

表 筆者が指導したこれまでの卒業論文、修士論文

年度	卒業論文・修士論文の別	氏名	タイトル
平成14年度	卒業論文	松尾美耶	不登校生徒のもつ母親イメージに関する研究—インタビューと心理アセスメントを用いて—
平成15年度	卒業論文	客野有紀	選択性緘黙児への感覚統合法と音楽療法の効果に関する研究
平成15年度	卒業論文	高岡 舞	青年期の子どもをもつ家族システムに関する研究—心理アセスメントとインタビューを用いて—
平成15年度	卒業論文	松井いずみ	筋萎縮性側索硬化症(ALS)患者の生活の質(QOL)の向上に関する研究
平成16年度	卒業論文	井上芙美	大学生における自己開示傾向とハーディネス性格特性の関連についての研究
平成16年度	卒業論文	中村 真実	被虐待経験、いじめを受けた経験が青年後期の自己肯定意識に及ぼす影響に関する研究
平成17年度	卒業論文	市橋明子	ソリューション・フォーカスト・アプローチにおけるクライアントの変化の過程に関する事例研究—グラウンデッド・セオリーによる質的研究の試み—
平成17年度	卒業論文	西山香織	介護職員の高齢者とのコミュニケーションによる職業意識の変化に関する研究
平成14年度	修士論文	永井 悟	小学校での担任教師からみた「気がかりな子」に対する対応についての研究—インタビュー手法を中心に—
平成15年度	修士論文	木本真由美	現代青年における認知スタイルとストレス反応の関連についての検討—コーピングを媒介として—
平成15年度	修士論文	松井 紀子	非行問題において保護者と少年補導職員の協働関係構築に関する研究
平成15年度	修士論文	向井陽子	神経難病患者の療養生活に関する臨床心理学的研究—生活実態調査とナラティブ・セラピーを用いた心理的ケアの検討—
平成15年度	修士論文	渡部 光	不登校問題における学校と家庭の連携に関する研究—担任教師・保護者それぞれが持つイメージをもとに—
平成16年度	修士論文	井美亜紀子	教師とスクールカウンセラーにおける情報共有のあり方に関する研究—共通理解と守秘義務を巡って
平成16年度	修士論文	近藤さやか	高等学校中途退学者の新進路選択に関する研究
平成16年度	修士論文	日根野聖子	母親の資源に関する研究—育児における大変さを乗り越えるために—

模・秋山,2003)⁽²⁾ (向井・加藤・相模・秋山,2003)⁽⁵⁾
 (松尾・相模,2003)⁽⁴⁾ (永井・相模,2003)⁽⁶⁾ (松井・相
 模・加藤,2004)⁽³⁾ (井上・相模,2005)⁽¹⁾ (中村・相
 模,2006)⁽⁷⁾ (西山・相模,2006)⁽⁸⁾。

これまで卒業論文に関しては臨床心理学関係のテーマ
 であれば、学生が自由に選んだテーマを筆者は指導して
 きた。しかし、修士論文を含めて概観すると、異業種の
 連携、資源、対応、回復過程などを多く扱っていると考
 えられる。今後はこのようなテーマを卒業論文・修士論
 文におけるゼミ指導で指導していくことが求められる。

また、研究手法ではKJ法やグラウンデッド・セオリー
 などの質的研究と、統計手法を用いた量的研究に分かれ
 る。今後も研究手法に関してはそれぞれの研究目的に応
 じて、適切なものを選択できるよう、今後も研究手法の
 幅を広げていく必要があると考えられる。

そして、研究により得られた知見をより有益な心理的援助
 活動のためにまたフィードバックしていくことが求められる。

V.おわりに

本稿では筆者のこれまでの研究活動を総括し、今後の
 授業や研究の指針を明らかにした。それぞれの活動の関
 係は図のようになり、それぞれの活動が密接に関連して

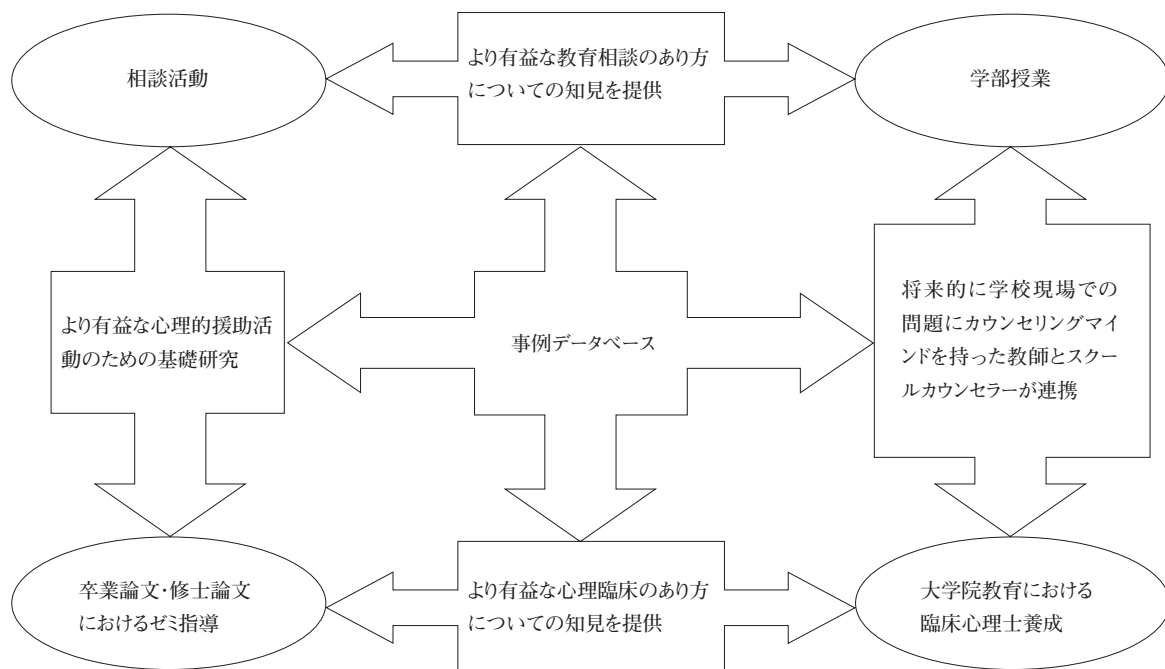
いくことが望まれる。

筆者は今後このような形式で研究活動を行い、研究結
 果を広く役立てたいと考える。

引用文献

- (1) 井上扶美・相模健人 (2005) 大学生における自
 己開示傾向とハーディネス性格特性の関連につい
 ての研究 愛媛大学教育学部紀要 第52巻第1号 89-96.
- (2) 加藤匡宏・向井陽子・相模健人・秋山智 (2003)
 神経難病患者の在宅医療・福祉サービスと患者の
 生活の質に関する研究 第1報 神経難病患者の生
 活実態調査 愛媛大学教育学部附属実践総合セン
 ター紀要 第21号 123-150.
- (3) 松井いづみ・相模健人・加藤匡宏 (2004) 筋
 萎縮性側索硬化症 (ALS) 患者の生活の質 (Q
 OL) の向上に関する研究 愛媛大学教育学部附
 属実践総合センター紀要 第22号 93-104.
- (4) 松尾美耶・相模健人 (2003) 不登校生徒の「母
 親イメージ」に関する研究—インタビューと心理ア
 セスメントを用いて— 鳴門生徒指導学会鳴門生
 徒指導研究 第13号 126-141.
- (5) 向井陽子・加藤匡宏・相模健人・秋山智 (2003)

図 今後の研究方針についての関係図



- 神経難病患者の在宅医療・福祉サービスと患者の生活の質に関する研究 第2報 神経難病患者の介護と臨床心理士の役割 愛媛大学教育学部附属実践総合センター紀要 第21号 151-164.
- (6) 永井悟・相模健人 (2003) 小学校での担任教師からみた「気がかりな子」に対する対応についての研究 —インタビュー手法を中心に— 愛媛大学教育学部紀要第I部 教育科学 第50巻 第1号69-76.
- (7) 中村真実・相模健人 (2006) 被虐待経験、いじめを受けた経験が青年期後期の自己肯定意識に及ぼす影響に関する研究 愛媛大学教育実践総合センター紀要 第24号 123-136.
- (8) 西山香織・相模健人 (2006) 介護職員の高齢者とのコミュニケーションによる職業意識の変化に関する研究 愛媛大学教育実践総合センター紀要 第24号 139-146.
- (9) 相模健人, 田中雄三 (2000a) スクールカウンセリングにおけるコラボレーション面接記録法の作成 家族心理学研究 第14巻 第2号99-115.
- (10) 相模健人, 田中雄三 (2000b) スクールカウンセリングにおいて解決志向アプローチを用いた2事例 九州神経精神医学第46巻第3号133-142.
- (11) 相模健人 (2003a) 学生の意見、アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その1—解決志向アプローチの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第49巻 第2号 57-77.
- (12) 相模健人 (2003b) 暴力行為を起こす児童に対してスクールカウンセラーが学校システムと連携した1事例 その1 —1年時学級担任とその指導教諭との面接— 愛媛大学教育学部附属実践総合センター紀要第21号79-92.
- (13) 相模健人 (2003c) 暴力行為を起こす児童に対してスクールカウンセラーが学校システムと連携した1事例 その2 —両親と2年時学級担任との面接— 愛媛大学教育学部附属実践総合センター紀要第21号93-106.
- (14) 相模健人 (2003d) 学生の意見、アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その2—解決志向セラピーの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第50巻 第1号 77-84.
- (15) 相模健人・渡部光 (2004a) 学生の意見、アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その3—解決志向セラピーの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第50巻 第2号 83-88.
- (16) 相模健人 (2004) スクールカウンセリングにおいて複数の問題行動児童を抱える担任教師にコンサルテーションを行った1事例 —Solution-Focused-Therapyを用いて— 愛媛大学教育学部附属実践総合センター紀要 第22号 83-92.
- (17) 相模健人・渡部光 (2004b) 学生の意見、アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その4—解決志向セラピーの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第51巻 第1号 71-76.
- (18) 相模健人・山内千加 (2005) Solution-Focused-Therapyを用いて、家族関係の改善がみられた不登校生徒保護者の1事例 心理臨床事例研究 愛媛大学心理教育相談室紀要 創刊号 75-83.
- (19) 相模健人・田中雄三 (2005) 教師と連携しながらウノを媒介として関わった相談室登校児童の1例 愛媛大学教育学部紀要 第52巻 第1号 89-96.
- (20) 相模健人・田中美紗・菅知絵美・河合美貴・友寄令子 (2005) 学生の意見、アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その5—解決志向アプローチの質問方法を用いて— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第52巻 第1号 101-106.
- (21) 相模健人・山内加奈子・池田歩美 (2005) 解決志向アプローチのための事例データベース作成の試み 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第52巻 第1号 97-100.
- (22) 相模健人・小嶋健治・松本円 (2006) 学生の意見、アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その6—解決志向アプローチの質問方法を用いて— 愛媛大学教育実践総合センター紀要 第24号 117-122.
- (23) 相模健人 (2006) KJ法を用いた質的な授業研究 —学生の評価をもとに— 愛媛大学教育実践総合センター紀要 第24号 107-116.